

No. 188 動物 キュウシュウカラヒメドロムシ *Sinonychus tsujunensis* (ヒメドロムシ科)

ヒメドロムシ類は、主に河川に生息する、1～5mm前後の微小な水生甲虫です。これまで亜種も含めて60近い種類が知られていますが、まだ名前がついていないものも多く存在しており、分類整理が十分に進んでいるとは言えません。近年、いくつかの県や河川レベルでのヒメドロムシ類の分布報告が発表されており、それらによると、地域ごとに、また、河川の源流域から下流域、河床の礫や砂、流木、植生の根際といった環境ごとに生息する種類が異なり、河川環境の指標種として注目されています。

先日、当センター職員が採集したヒメドロムシ類の標本を調べていると、手持ちの図鑑には載っていない、ひときわ小型でずんぐりとした、一見して異形のものが目に付きました。それが写真1のキュウシュウカラヒメドロムシで、この標本が採集された年と同じ2012年に名前がつけられたばかりの“新種”でした。

キュウシュウカラヒメドロムシは、熊本県山都町のほか、大分県中津市、熊本県人吉市、鹿児島県川辺町から得られた標本をもとに新種として発表され、その後、大分県日田市、長崎県諫早市からも記録されています。山都町では、通潤用水から採集されていて、学名にある *tsujunensis* は「通潤の」という意味です。

前述の当センター職員採集の標本は、熊本市の雁回山中腹を流れる小川から得られたもので(写真2)、他の産地でもおおむね丘陵地の砂泥底の小川から採集されているようです。

1mmちょっとしかなく、食性も含めて謎の多い本種ですが、熊本県には、まだまだこうした未知の生き物が、人知れず生息しているということを想像するとワクワクしませんか？

(中菌洋行)



写真1 キュウシュウカラヒメドロムシ



写真2 キュウシュウカラヒメドロムシの生息環境



熊本県博物館ネットワークセンター

URL <http://kumamoto-museum.net/kmnc>

〒869-0524 熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

メールアドレス [hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp](mailto:hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp)

編集・発行  
熊本県博物館  
ネットワークセンター  
宇城市松橋町豊福1695  
Tel. 0964-34-3301  
2016年10月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



熊本県博物館ネットワークセンターの活動を一部再開しました！

4月に発生した熊本地震では、熊本県博物館ネットワークセンターも被災しました。このため、現在は休館し、復旧に取り組んでいます。また、8月からは自然観察会などの館外で開催できる行事等について、一部再開しています。

今後もさまざまな行事を計画しておりますので、ふるってご参加下さい。



フィールドミュージアムへ飛びだそう！「火星・土星と夏の星座を観察しよう」  
(平成28年8月6日(土) 熊本県民天文台)

なお、行事等の詳細につきましては、熊本県博物館ネットワークセンターのホームページをご覧ください。

URL <http://kumamoto-museum.net/kmnc>

P T A 活動や子ども会活動で利用してみませんか

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ドンダリクラフト」「貝がらクラフト」「草木染め」など、体験を通して自然や文化に触れることができるプログラムを準備しています。P T A 活動や子ども会活動で利用してみませんか。熊本県博物館ネットワークセンターの職員が、お伺いします。

体験に係る費用は材料費のみで、職員の交通費、謝礼は必要ありません。

なお、申し込み方法やプログラム内容は、博物館ネットワークセンターのホームページをご覧ください。



草木染め

No. 184 植物 イソヤマテンツキ *Fimbristylis sieboldii* (カヤツリグサ科)



塩分を多く含む海水、強い日差しによる高温や乾燥、強い風や波で土壌が絶えず動くなど、海岸は植物にとってとても厳しい環境です。

湿地を好むカヤツリグサ科テンツキ属植物の何種かは、この厳しい海岸に適応して生育しています。その一つがイソヤマテンツキです。和名の「イソ」は「磯」で、海岸に生えることに由来します。全体に硬い植物で、茎は時に40cmほどの高さになり、その先に長さ1cm強の細長い小穂（花穂）が少数集まった花序を付けます。長さ1mm程度の果実は倒卵形で、断面はレンズ型、表面は滑らかです。果実の先端に残るめしべの柱頭には毛が生えています。



果実

写真の標本は、1967年に宇城市三角町で採集された標本で、これを含め52点のイソヤマテンツキの標本が当センターに収蔵されています。これらの標本は、道路や防災施設の建設のような人為、あるいは自然の影響を受け変化しやすい海岸の植生を記録する貴重な資料となっています。（前田哲弥）

No. 185 地学 オオバタグルミ *Juglans cinerea* var. *megacinerea*

作家の宮澤賢治は、地質学・鉱物学に造詣が深く、その作品には地質や鉱物についての事柄が数多く織り込まれています。実は、彼はある化石を日本で最初に発見した人なのです。

その化石は、宮澤賢治が岩手県花巻市の約150万年前の地層から発見したもので、早坂一郎博士によってアメリカ東部に自生するバタグルミ (*Juglans cinerea*) の化石として発表されました。現在ではバタグルミではなく、化石種のオオバタグルミ (*Juglans cinerea* var. *megacinerea*) と名付けられています。

写真1の標本は、上天草市大矢野町柳で産出したオオバタグルミの種子です。この化石は、大矢野島に分布する約300万年前に堆積した砂礫や砂を主体とした地層（大矢野層）から産出しました。

オオバタグルミの種子は、写真1で見ると、全体的に細長く、表面は縦に刻まれた深いシワによってできたヒダ状のもので覆われています。日本に自生するクルミの仲間は種子の表面のシワが浅いので（写真2）、双方を比べると、形が全く異なっていることがわかります。

オオバタグルミの化石は、日本だけでなく世界各地でも発見されていることから、かつては世界中に広く分布していたクルミであることがわかっており、さまざまな研究がなされています。

『銀河鉄道の夜』では、このクルミ化石の発見を元にした記述がありますので、探してみてもどうでしょうか。（廣田志乃）



写真1 オオバタグルミの化石



写真2 日本に自生するクルミ (オニグルミ)

No. 186 民俗 お櫃とお櫃入れ

お櫃は、炊きあがったご飯を移し入れる容器です。熊本県内ではイイビツ、メシツギなどと呼ばれています。杉や桧、榎など、吸水性の良い素材で作られた桶、あるいは曲げ物が一般的ですが、冠婚葬祭には漆塗りのものも使われました。

お櫃は、ご飯の粗熱を取り余分な水気を吸収します。そのためご飯は、より美味しくなると同時に、保温と調湿の効果から冷めても硬くなりにくくなります。昔は、一日分のご飯を一度に炊くことが多かったため、ご飯を長時間美味しく保存する工夫がされていたのです。さらに、冬の寒い時期には、稲わらを編んで作ったお櫃入れの中にお櫃を入れて保温していました。（迫田久美子）



お櫃（桶）36×36×28cm  
熊本市北区池田町



お櫃（曲げ物）27×27×15.5cm  
玉名市天水町部田見



お櫃（塗り物）23×23×12cm  
天草市牛深町



お櫃入れ 34.5×34.5×23.5cm  
玉名市天水町部田見

No. 187 歴史 感謝状（八代市竹田家資料）

大正3年（1914）に開戦した第一次世界大戦に際し、日本赤十字社は、フランス・イギリス・ロシアに対して、3班の救護班を派遣しました。

写真1は、この時にフランスに派遣された仏国派遣救護班が、任務を終えて帰国する直前の大正5年（1916）6月に篤志看護婦の団体ユニオン・デ・ファム・ド・フランスのA. ボンヌフーから仏国派遣救護班員へ贈られた感謝状で、救護看護婦として救護班に参加した竹田ハツメが保管していたものです。

このA. ボンヌフーは、ユニオン・デ・ファム・ド・フランスでパリ第16区の代表を務めていて、救護班が勤務していたパリの日本救護病院で篤志看護婦として勤務していました。

この感謝状の末尾には、「A. Bonnefous」と書かれた本人直筆のサイン（写真2）があります。そして文面には、「海のはるか向こうから17ヶ月の長い間、昼夜、大勢の負傷兵を治療してくれたことを感謝する」や、「日本赤十字社の救護活動によりフランスからの名誉を得た」と記されており、「塩田医長と班員への名誉はとても表彰されるでしょう」と結ばれています。

当初フランスで評価が低かった救護班が、救護活動の結果、フランス政府だけではなく、フランスの人々からも評価を受け、また信頼されるようになったことがわかります。（堤将太）



写真1 感謝状

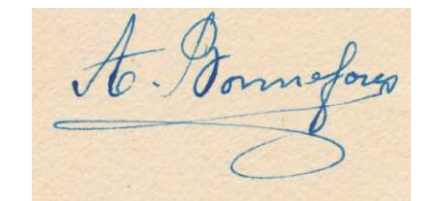


写真2 感謝状（サイン部分拡大）